

概念の再編成、とりわけ新たな命名法の追求である。

こうした提案を生かすためには、再評価の方法論が問題となるだろう。抽象化・一般化が、近代の方法を基準として行われる時、他方の特質をこわすことなく、それを遂行しているかどうか問われねばならない。とりわけ無限の連続変化として事物をとらえる気の思考法を、「分ける言葉」である近代の記号体系によって抽象化したり再編成することの意味を、考え直すことが重要であるように評者には思われる。

(石田 秀実)

〔岩波書店、東京都千代田区一ツ橋二一五―五、電話〇三―五二一〇―四〇〇〇、平成十四年十一月二十二日、四六判、二〇八頁、二七〇〇円〕

古西 義麿 著

### 『緒方洪庵と大坂の除痘館』

蘭方医療が漢方医療に対して現実的で決定的な勝利を民衆に印象づけたのは、天然痘による幼児の悲惨な死から牛痘接種が防御したことであった。官の手を借りず、民間の蘭方医達が協力し、大々的に牛痘接種をおこなったのは、緒方洪庵を中心とした大坂除痘館の面々であった。

長年大阪市立図書館館長などを歴任され、かたわら緒方郁藏、伊藤慎藏の研究、億川家(洪庵夫人八重の実家)解体時

の八重夫人の書状などの資料発掘、研究などに尽力された古西義麿氏が大坂除痘館の活動を主体としたこの本を出版された。氏はこの書名と同じ主題で、平成十三年春、母校の関西大学から文学博士の称号を授与された。

この本は本章七章と補章二章から成り立っている。第一章大坂の除痘館をめぐって、第二章 原老柳・松本俊平と大坂の除痘館、第三章 丹波の種痘医松本節斎とその一族、第四章 種痘をめぐる市井の人々、第五章 大坂における近代種痘制度の展開、第六章 近代における天然痘予防の歩み、第七章 「大坂除痘館」に加わらなかつた種痘医たち、補章一 緒方洪庵「膠柱方」(適塾の基準処方集)について、補章二 緒方洪庵夫人・八重の生涯と大坂の除痘館。

第一章においては、緒方洪庵と日野葛民(鼎哉の弟)が京都の日野鼎哉と福井の笠原良策から嘉永二年(一八四七)十一月、牛痘苗を分与され、大坂除痘館を設立、種痘活動を開始、幕末までの二十年間、洪庵以下延べ三十余名の医師が参加し、活躍した状況が述べられている。そしてさらにこの痘苗が、幕末までに、近畿、中国、四国の三一か国一七二か所に分苗されたことを検証している。

第二章では、大坂除痘館で洪庵とともに活躍した原老柳(左一郎)と彼の娘婿松本俊平にスポットをあて、彼等の履歴、姻戚関係、門人録、除痘館における関与について述べられている。

第三章では、大坂除痘館から分苗された丹波氷上郡谷村の

医師松本節齋(前記俊平の父)及び彼の女婿足立敬里の経歴、姻戚関係、この地方における彼等の種痘活動について述べている。

第四章では、緒方洪庵と親密な関係にあった儒家広瀬旭壮の日記「日間瑣事備忘」から自家をふくむ種痘記事を抽出、一般庶民側からの種痘活動とのかかわりを述べている。

第五章では、維新以後明治初期における中央政府および大阪における種痘施行制度の変転極まりない状況と次第に種痘施行に関する法律が整備されて行く様子が記されている。第六章では、さらなる免疫力強化のための再三の種痘実施の問題および強制種痘について論じている。

第七章では、大坂除痘館と関係なく大坂地方で種痘を行った明石天民、森義仙、霖義仙の種痘医の活躍を諸種の資料から検証しているが、しかし彼等の使用した痘苗の由来は不明とのこと。

補章一では、近年発見された二種の適塾の処方集「膠柱方」(一種は著者が発見)を紹介し、二種の比較表を掲載している。

補章二、洪庵夫人八重(撰津有馬郡名塩村、現西宮市名塩生まれ、医師徳川百記の娘)の大坂除痘館跡の隠居所での終焉までの略伝について述べている。

大坂除痘館の活動についての他の多くの研究者の文献も多数掲載されているので、非常に有用な著書であると考ええる。

此の著書が活用され、大坂除痘館から分苗された各地方の医

師たちの活動が、各地の本会員によって明らかにされることを期待したい。

(中山 沃)

〔東方出版、大阪市天王寺区大道一―八―十五、電話〇三―六七九―九五七―一、平成十四年十二月二十五日、B五判、二二二頁、二五〇〇円〕

村松 学佑 著

### 『甲斐国医史』

本書の内容は天正より大正までの甲斐の医学史である。

本書によれば著者村松学佑(歟三)は、明治二年現山梨県市川大門町に出生し、東京帝国大学医科大学を卒業後、山梨県(現県立中央)病院長を勤めた。明治三十七年開業後、富士川游著『日本医学史』を読んで本書の編纂を志し、甲斐の医学史の資料を集め始め、大正五年山梨県志編纂会参与となり、多くの困難辛苦に耐えて大正十三年十月に本書を脱稿したが、流行性感冒の為大正十四年四月死去した。

本書は出版されなかったが、一部は四雑誌に掲載された。

また編纂資料の「山梨県志医事衛生資料」(山梨県立図書館蔵)は「山梨県立中央病院史」、辻邦生著『銀杏散りやまず』等の甲斐の医学史の本と論文の基本文献となってきた。

本書の出版計画は遺族により再び進められ、第二回目は堀